『淨土論』に於ける奢摩他・毗婆舍那に就て

金子大榮

一

奢摩他・毗婆舍那とは云何なることであらうか。その字義は止・觀の譯語を出でぬであらうが、併しその止・觀といふは、何を云何に止・觀するのであるかに就いては、經論の說頗る多樣であつて、望洋の嘆なきを得ない。特にその叙述が詳細を極めてあることを見れば、それが云何に修道者に取りて重要なものであり、隨つてまた云何に能く體驗せられたものであるかを想像することが出來るそれにも關らず吾々は容易にその止・觀の妙趣を味ふことが出來ぬことを思ふと、古典の中より生命の泉を掬むことの、今更らに至難なることを感ぜざるを得ない。

併し經論の說は多岐であるとはいへ、その本質は極めて單純なものであらう。卽ち奢摩他・毗婆舍那は、修道上の至純なる境地であるに違いない。而してその根源は、恐らく菩提樹下に於ける釋尊の靜觀であらう。惡魔降伏は卽ち奢摩他である。經論に於いて奢摩他に入ることの用意を說く文字を見れば、吾々はその叙述の中に惡魔降伏の物語を想起するのみならず、また明かに奢摩他に於い

て魔降多きことを說いてある場合が尠くない。然るに惡魔降伏とは何を意味するであらうか。それは飽くまでも雜音の世界を捨離して、絕對沈默の世界に入り、外物を追ふ散亂の心を止めて、眞實內觀の境地に住することであらう。散亂の心は單に眼を閉づることに依りて去るものでない。寧ろ强き惡魔は却つて眼を閉じる時に現はるゝのである。諸論に五種又は六種の心散亂を說く、卽ち外心散亂・內心散亂・邪緣心散亂・麤重心散亂・作意心散亂等である。これらの散亂を說明する文字を見れば、吾々が外を尋求する散亂の根抵には、內我を執する無明があることは明かである。これ卽ち惡魔降伏の至難なる所以である。

然るに奢摩他が惡魔降伏であるならば、毗婆舍那は、正しく惡魔を降伏し終れる釋尊の內觀そのものである。それ故毗婆舍那の對境は、生死因緣の世界である。無明より生・老死への順逆二觀である。然るにかく生死の因緣を觀ずる智慧は、生死を肯定するものでなくて、嚴肅に否定するものなるが故に、それは明かに涅槃に對向してゐる。而してこの涅槃に對向する智慧が、生死の源因を限りなく自己に求むる時、そこに如實の因緣が觀察せらるゝのである。これ卽ち因緣觀の敎法となれる四聖諦も、對向涅槃の無漏智に依る現觀の境とせらるゝ所以であり、また因緣觀の說明と見ゆる『瑜伽』の三性觀に於いて、「未だ眞實性を見ずして因緣性を知るべからず」と說く所以である。限りなく內觀せしむるもは眞實性である。また限りなく內觀するが故に因緣性の依止として阿賴耶があ

らねばならぬ。之に依りて吾々は『解深密經』に、毗婆舍那は事理を分別するものであり、而してまた實に「この心還つてこの見る」ものであると說く意味を瞭解することが出來る。彼の『起信論』等が眞如と萬法との融一を觀るところに、止・觀融合の境ありとするも同樣に瞭解すべきであらう。

この止・觀成就して釋尊は佛陀となられた。これ卽ち菩薩といふも、佛といふも所詮は止・觀成就の者に外ならぬことを現はすものである。論に依れば、止・觀成就して現はるゝものは神通である。然るに神通は奇蹟の力として解せられてゐる。それは恐らく誤れる解釋でもないであらうが、併しそれを得意とするが佛敎の本領でもないであらう。吾々は今神通の文字を精神感通することであると領解する。一を見て十を悟るは神通である。ものゝ奧を洞觀するは神通である。かく領解すれば吾々は止・觀成就の神通に於いて明かに二方向を見ることが出來る。一つは一切衆生に神通するのである。一つは涅槃に神通するのである。生死の因緣觀はそのまゝ涅槃に神通するものなることは、既に說けることにて明瞭である。涅槃に神通せざる限り因緣觀は完全でない。思ふに漏盡通とはこれを現はすものであらう。然るに限りなく因緣を自己に求むる智慧は、其所に一切衆生の內的運命を洞觀するは、また察知するに難くはない、內觀者はその內觀の智慧に於いて、既でに一切衆生を負うて立つてゐるのである。故に能く自己に徹することに依りて全人を知り、また一切人を知るのである。成道物語に於ける釋尊の宿命・天眼等の神通はこれを示すものではなからうか。

かくして仰いで涅槃に神通し、俯して一切衆生に神通するところに、自利・利他の大悲は生れる。これ卽ち菩薩であつて、佛はその極限の人格である。

二

己上は一般的に且つ根源的に奢摩他・毗婆舍那の何たるかを考究したのである。然るに大乘の經論に依れば、止・觀の對境として見逃すべからざるものがある。それは卽ち敎法である。『解深密經』に依れば、奢摩他・毗婆舍那の所緣は明かに十二分敎であつて、而も經典を綜合する範圍の廣狹に依り、別法・總法等の止・觀が別たれてある。「各別の契經等の法を緣じて作意思惟するは別法の奢摩他・毗婆舍那、一切の契經等の法を緣じて作意思惟し、眞如に隨順し乃至涅槃に隨順するが總法の奢摩他毗婆舍那」である。而してその總法に於いて、小總法・大總法・無量總法を別ち、奢摩他・毗婆舍那の終極理想は、一切の經典の根本一なることを領解するにあることが示されてある。卽ち吾々は釋尊の自內證を想念して、眞實の內觀の世界に止・觀を見たるに、今や轉じて如實の敎法を觀ずることが止・觀の對境となつたのである。

併し言ふまでもなく敎法を止觀するは夫に依りて釋尊の自內證に入ることである。それ故敎法を止・觀するものは敎法の種々相に囚えられずに、眞如一味であることを領會することを理想とする。

しかして眞如一味と領會することは、またやがて如實に生死因緣を知る所以であらねばならぬ。而してかく眞如・敎法・因緣等を如實に止・觀することが、地上の菩薩の修行とせられた。『攝大乘論』に依れば、「菩薩地々に於いて奢摩他・毗婆舍那を修するに五相の修習あり、一に集總修、二に無相修、三に無功用修、四に熾盛修、五に不知足修」といふ。更らに世親の『釋論』に依れば、第一の集總修に依りて二障の種子は除かれ、第二の無相修に依りて敎法の種々相に囚はるゝ心から離れて法苑の樂を證し、第三の無功用修に依りて眞俗二境に通達し、第四の熾盛修に依りて法身を成就し、第五の不知足修に依つて更らに上地へと進趣すると說明してある。これらの說明は、敎法・眞如・因緣の歸一を現はすものと見るべきではなからうか。

敎法を止觀するといふことは、敎徒の精神である。然るに敎法が一見種々多樣であることは、また拒むことの出來ぬ事實である。隨つて敎徒はその多樣に於いて純一なるものを感得せねばならぬ。經の別法・總法の止觀もこれが爲めに說かれたのである。第三地に於いて勝流眞如を發見する歡びもこゝにあるのである。世親が「如來、衆生の根性及び煩惱行に隨つて種々の法相を立つ。若し人文の如く義を判せば、この種々の法は前後相違せん。もし此の相を執せば疑惑を離れず、正法の中に於いて現世に安樂に住するを得る義なからん。若し無相修に依りて正法の中に種々立相の想を離れ、この正說は同一眞如味なるを觀じて心に疑厭なければ、正法の中に於いて縱任自在なるが故に現世

安樂住を得ん」といふもの、以つて直ちに彼れが云何に經典の種々相に惱みしかを語るものとも見ることが出來よう。

然るにかく教法の眞義を求むるは、卽ち釋尊の自內證に接せんが爲めであり、それは常住の如來を見んが爲めである。眞如を教法の本質とし、淨法界等流の教法とすることは、やがて教法を法身證得の唯一なる緣とするものである。『佛性論』等に見ゆる正得法身・正說法身の說は、かくて領解することが出來る。如來の法身は常住である。されど奢摩他の水澄まざる心海にはその影が映らない。無著はいふ「衆生罪あるが故に現ぜざること、月の破器に於けるが如し。諸の世間に遍滿し給ふこと、法・光日の如くなるに由る」と。世親これを解釋して曰はく、「佛身は常住なれども衆生罪あるが故に現ぜざること月の破器に於けるが如し。有情身中に奢摩他の水なければ佛身は現ぜざるなり。而も世間に遍く佛の現はるゝことは日光の遍きが如し、契經・應頌等の法を以つて一切の佛事を施作し給ふ」と。無性の『釋論』はまた「これ衆生の過にして如來の失にあらず」と說明してゐる。之に依りて吾々は論家の止觀は、契經を所緣として常住の法身を見るにあることを想定することが出來る。如實の因緣を知るといふも、一切衆生を利他すといふも所詮はこの見佛から出生するのである。

三

こゝに於いて吾々は主題とせる『淨土論』の奢摩他・毗婆舍那を思ふに、それは正しく上來考究せる止・觀の一例と見ることが出來る。この『無量壽經憂婆提舍願生偈』は「我、修多羅眞實功德相に依りて、願偈愍持を說き、佛敎と相應せん」といふ願に依りて造られた。これ卽ち『解深密經』の別法より總法への奢摩他・毗婆舍那を意味するものではないであらうか。修多羅といひ佛敎といふ、これ實に止觀の所緣である。これに相應せんことは瑜伽の本志である。されば敎と行と境とに相應せんとする瑜伽師としての世親を、吾々は今『淨土論』にも見るのである。卽ち斯論に於いては、與佛敎相應と共に如實修行相應を說き、廣略相入の境を理想する。世親は今や如實相應の道を、『無量壽經』に發見したのである。

之に依りて思ふに、『淨土論』の本旨は見佛にあることもまた拒まれぬようである。敎法を止觀して眞如を體得し、眞如の體得に於いて如來を見る。故に斯論も觀「彼安樂世界」見「阿彌陀佛」願「生」彼國」を以つて大意とすることを自ら示現してある。五念門の修行もその成就する所は、畢竟得「生」安樂國土」見「彼阿彌陀佛」の外はない。而してこの阿彌陀佛といふは『無量壽經』の止觀より來るのであつて、それはやがて總法止觀として唯一普遍の如來である。盡十方無碍光如來である。それは奢摩

他の水中に映ずる佛月である。同樣に安樂國土もそのまゝ普遍の蓮華藏莊嚴世界と一味なのである。

かくして願見彌陀佛と念じて如實修行する、其所に『淨土論』の本旨がある。廣略相入の止觀もこゝから現はれる。一法句は淸淨句、淸淨句は眞實智慧無爲法身、これ卽ち奢摩他の水に映る永遠の如來である。之に對して二十九種の莊嚴は、無爲法身の內德として廣く毗婆舍那の對境となるものである。若し眞實性に依りて依他性を知るといふ原理に從へば、二十九種の莊嚴は卽ち淨分の依他法である。それ故淨土の本體は『攝大乘論釋』に說くが如く、「淸淨自在の唯識智」である。また彼論に淨土の依止圓滿を說明して、「法界眞如よく淨土の依止となる、……如來願力所感の寶蓮華よく淨土の依止となる」といふものは、斯論の一法句・願心莊嚴と歸を一にするようである。

併し吾々が先に考究せる如くならば、眞如は正さに還つて如實に生死の困緣を觀ぜしむべきである。然るに斯論では生死の因緣に對する淨土の因緣が觀ぜられてある。これ蓋し『無量壽經』の憂婆提舍である特殊の止觀ではあらうが、併し淨土觀そのものは一般に菩薩の行であるから、吾々はまた特にこの淨土觀の旨趣を知らねばならぬ。卽ち生死因緣を如實に觀ずる者は、之に依りて涅槃界に神通するが、今や却つて如實に涅槃界を觀ずることによりて生死に神通せんとするのである。「奢摩他毗婆舍那廣略修行して、……巧方便廻向を成就する」のである。吾々はこゝに涅槃界を以て純淨

なる虚無として、その内容は唯だ生死の現實の投影に於いてのみ見るべきであるか、或は反對に涅槃界を以つて無量の功德莊嚴せる理念の世界として、生死の現實こそ暗黑なる虚無と觀るべきかを考へしめられる。而して願生といふことは、恐らく後者の意味に於いてのみ成立するであらう。

されど吾々は之に依りて二つの方向を矛盾するものと思ふものではない。寧ろ異なるが如く見ゆるは、唯だ觀の一面に過ぎぬことを思ふものである。たとへ涅槃界の内容は生死界の現實を反映するとしても、その反映は決して空想の筆にて彩色し得らるゝものでない。實に生死の現實を淨化し、強き否定を經て涅槃界を莊嚴せんとする願心に依りて成就するのである。故に淨土の本體は所謂現實界でもなくまた理想界でもなく、實に願心そのものである。『大方廣佛華嚴經』に蓮華藏莊嚴世界を說くや、常に菩薩の願の音聲を以つて淨土の體を現はしてある。菩薩は本願である。本願は音聲である。而してこの菩薩・本願・音聲とそは淨土の本體である。故に淨土を觀るものは本願を觀ずば、その觀は徹底せるものでない。それ卽ち『淨土論』の願偈が觀佛本願力に極まり、解義が願心莊嚴を顯示する所以である。

然るに淨土を觀ずることは、その本源なる本願を觀ずることであるといふことは、同時に淨土を觀ずる背景には深い生死因緣觀があるといふことである。この事は願偈に於いて二十九種莊嚴の最初の惣句として、「觀彼世界相勝過三界道」と說ける文字に既に充分に現はれてゐる。さればこそ本

願を觀るものは、遂に生死因緣の世界に廻入して、利他敎化の大悲を起すのである。廻入生死園煩惱林中、遊戲神通至敎化地、以本願力廻向故といふことは、かくして善く領解せらるゝのである。止觀の菩薩は如來の願海に歸入し、如來の願と菩薩の願と一味となりて利他敎化に出づるのである。而かもこの利他敎化は、淨土止觀の背景に深い生死因緣觀がなくては、成立する筈がないのである。されば淨土莊嚴の願を體驗せるものゝみ、眞に利他敎化の願に動かさるゝのである。

四

上來の所論は『淨土論』を以つて奢摩他・毗婆舍那は說くものとするのである。而して奢摩他・毗婆舍那は地前の菩薩にも通ずる行ではあるが、併しその眞なるものは十地の菩薩に於いて顯はるゝのである。されば此の點から世親の願生は第三地の行であるといふ說が成立するように思はるゝ。(第三地云云のこと、『佛敎研究』第一卷第二號に論せり。この論文はかの論文を多少訂正する意味を以つて作れり。)事實吾々はこの說に反對する材料を直接に『淨土論』に見出すことは困難である。既に斯論の文字が種々の點に於いて十地の止觀を想起せしむることの多いことは上述の如くである。加之、論に觀佛本願力の不虛作住持功德を說明して、「未證淨心の菩薩は畢竟して平等法身を證するを得、淨心の菩薩・上地の菩薩と畢竟して同じく寂滅平等を得」といふものは、曇鸞も『論註』に指示

せる如く、世親自ら未證淨心の菩薩として、淨心の菩薩たらんとする願を暗示するものとも觀らるゝのである。

勿論世親の願生は第三地の行であるといふことは、直ちに凡夫往生の不可能を證明するものではないであらう。故に世親を未證淨心の菩薩としての願生者とせる曇鸞も、論の普共諸衆生を說明して一切外夫人とし、その往生の可能を說いて居る。卽ち曇鸞の『淨土論註』は一つに論の五念門の行は地上にのみ限らず、實に一切の願生者に通ずるものなることを現はさんとせるものである。吾々はまた强いて罪障に滿つる自己の生活を推して、龍樹・世親等と類を同うするものゝ如く憶斷する邪見憍慢を避けねばならぬ。寧しろ龍樹・世親の聖德を仰ぎつゝ、それ故に凡聖齊しく廻入し得る本願のいよ〳〵廣大なるを慶喜すべきであらう。

併し吾々は論の奢摩他、毗婆舍那に就いては、尙ほ注意すべきことが殘つてゐる。それは論の止・觀は世親に取つて現實であるか理想であるかといふことである。心常作願一心專念畢竟往生安樂國欲如實修行奢摩他といへば、奢摩他は往生して後の行のようである。奢摩他・毗婆舍那、廣略修行……作願攝取一切衆生共同生彼安樂佛國といへば、止・觀は願生の行のようである。終末に果の五門を說くところにも奢摩他・毗婆舍那の語出でゝ居るが、それは願生の行とすべきであらうか彼土に於ける行とすべきであらうか。これを正しく領解する爲には、恐らく願生の行その者を無限

とする外はないであらう。卽ち淨土は願生心の客觀的理念の世界であるが故に、願生の行はやがて淨土の行である。

同樣の事實は他の論文に於いても常に觀ぜらるゝことである。吾々は經論に於ける十地の願行や六婆羅密やを見る時には、常にそれは論家の現實生活であるか、または理想であるかを怪しむのである。その叙述は現實を離れたる單なる理想とのみ見ることを許るさぬものがある。併しそれが直ちに古の聖賢の現實生活であつたと思ふには、餘りに廣大である。少くとも聖賢自ら「我はこの地位にある」と自證せるものと思はれない。この疑問を解くには、眞に現實なるが故に理想であり、また眞に理想なるが故に現實であることを領會せねばならぬ。而もこの現實と理想との歸一は何を意味するであらうか。そは本願力その者を根本の實在として、人はこれを感得してこれに參加するときに菩薩と言はるとしてのみ領會さるゝのである。卽ち人は本願の主でなくして、本願こそ人の主である。然るにかく本願に依りて「人」が與へらるゝとすれば、凡夫といへども本願力を感知する限り菩薩である。龍樹・世親の願生も今日の吾等の願生も本質的には一つである。吾々は徒らに地前・地上の名に拘泥してはならぬ。佛の本願力に乘托するときは、凡夫人もそのまゝ歡喜地の菩薩である。その願生は第三地の願生と本質的に一である。そのまゝ等覺の菩薩である。之に依りて世親は五念を善男子・善女人の行となし、曇鸞が論の普共諸衆生を一切の凡夫人とせることも領解せら

る〻。本願の天地は凡聖善惡をそのまゝにして平等一味の信を與ふるのである。

併し本願を感得することは、論にありては奢摩他・毗婆舍那である。されば吾等凡夫が本願力に乘托する心には、其所に奢摩他・毗婆舍那がなくてはならぬであらう。それは果してあるであらうか。勿論既に論せる如く、止觀は願生心より生ぜるものであり、同時に願生心は止觀に依りて如實となる。また止觀によりて佛の本願力を知ると同時に、止觀せしむるものは佛の本願力である。それ故佛の本願力を信知する心は、そのまゝ止觀であらねばならぬ。されば吾等凡夫に止觀の行ありやいなやを考ふるよりは、寧しろ吾々は現實に云何にして本願力を領會するかを反省すべきである。恐らく吾等の止觀は其所に嚴存するであらう。

然るに吾々が本願を領得するは、一面明かに善知識の敎に依りてゞある。卽ち世親の「世尊」と呼び我依修多羅といふものこれである。併し世尊と呼び敎に信順せしむるものは何んであらうか。就人立信は就行立信なしに成立し得るものでない。されば吾等に於ける就行立信は何であらうか。思ふに吾々をして最も直接に本願力を感得せしむるのは、罪惡觀を外にしてないであらう。如實の罪惡觀は罪惡を感することに依つて如來の救濟を仰ぐものでない。如實の罪惡觀は凡夫一切の願求をして沈默せしむる。罪惡觀は卽ち聖なる沈默である。それは其儘「念佛申さんと思い立つ心」である。主觀の體驗に於いては罪惡觀と念佛申さんとする心とは別なものでない。それは夫故我に代表せら

るゝ十方衆生の聲である。しかも凡夫一切の願の沈默は實に如來の願心の顯現である。卽ち凡夫の沈默せる所に如來の招喚の聲は響き渡るのである。かくして吾々は罪惡觀に於いて、與へられたる止觀の境地を見るのである。

之に依りて思ふに世親の奢摩他・毗婆舍那に於いても、明かにこの罪惡觀があつたに違いがない。吾々は既に淨土觀の背景に深き生死因緣觀があることを論じた。然るにこの生死因緣觀こそは罪惡觀ではないであらうか。勿論かく論定することは釋尊と世親を吾々とを一つにし、佛・菩薩・凡夫の區別を徹回するものゝ如く思惟せらるゝが故に、飽くまでも三者を別視せんとする傳習觀念に囚えられつゝある吾々には、尙ほ釋然たらぬものがあるのである。併し吾々は『辨中邊論』や『佛性論』等が、特に佛・菩薩・凡夫の無差別を說くを思ひ、菩薩の反省に於いて凡夫ありその理想に於いて佛あるを思ひ、また罪惡能感の主觀を思ふ時、深き現實の自覺の上に「三昧常寂にして智慧無碍なる」願心の廻向を領會することの、極めて自然であることを思はざるを得ぬのである。若しさうでないならば、凡夫といふも自我の偶像に過ぎず、佛といふも眞佛の化身に過ぎぬであらう。凡夫往生の道は一切衆生を救濟する廣大な道であるが故に、また極めて嚴肅な道である。こゝに菩薩もその自覺に於いて凡夫であり、凡夫もその自覺に於いて菩薩心を賦與せらるゝのである。之に依りて親鸞聖人が『淨土論』を以つて、「本願のこゝろを說く」ものとし、特に「一心の華文」と呼ばれしことが如

實に領解せらるゝのである。

併し佛・菩薩・凡夫の無差別といふは、唯だ本願の根源に徹する本質的の意味に於いてゞある。飜つて始めて如來の本願を開闡し給ひし釋尊を思ひ、また、それを領受して『願生偈』を說き給ひし世親を思へば、其所に恩德廣大なる敎主世尊と、解義深遠なる菩薩世親を發見するは言を俟たない。而して吾々は實に唯だその敎說に知遇せるを歡ぶ底下の凡夫に外ならぬのである。

――大正一一。三、三――